氏　　名　佐川眞理子（さがわ まりこ）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第162号
学位授与の日付　平成14年5月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　女性の神経症とその精神病理
——精神分析学的観点からの接近——

論文調査委員　（主査）教授 新宮一成　教授 大東祥孝　助教授 小山静子

論文内容の要旨

本論文は，女性に多いとされる神経症の精神病理について，精神分析学的な観点から考察したものである。現代社会において女性に好発する様々な神経症や心身症の症状の意味を，精神分析学的に検討することで，どのような病理が共通しているのかを明らかにした。とくに，女性の社会的な位置と精神疾患の変遷との関係について詳しく考察した。

序章では，ここ100年間における女性に多い精神疾患の推移からみて，20世紀後半，いわゆる先進国において急増した摂食障害は，19世紀末から1920年代にかけて隆盛をきわめその後衰退したかつてのヒステリーと関連があるのではないかという仮説をたてた。

第Ⅰ部（症例編）では，実際に関わった症例を検討した。第1章では，「跡取り」という社会的価値が摂食障害の症状形成に密接に関係していた症例を検討した。症例は「跡取り」である痩せた父親に口唇的に同一化して，「跡取り」としての自分のあるべき姿を症状によって周りに示していたと考えられた。このように幼少期における「跡取り」という社会的価値の早期の取り込みが，女性としての精神—性的発達の動機付けを阻害する可能性を示し，摂食障害の症状が，周りからの期待に女性が応える方法の一つではないかと考えた。第2章では，他者と関係する時に性差があること自体を認めず，必要な時は意識を解離させて男性人格にもなれる多重人格の症例をあげた。解離はヒステリーの基本機制で，そこでは他の性にもなれる完全な身体を持つ人間として，自分を見せることが問題になっていた。第3章では，3例の青年期女子の神経症症例の親子関係に焦点をあてて，自己愛，および異形の身体像（症状）との関連をみた。こどもの身体は，親の期待やかつての不安を担う場所となっており，異形の身体症状は，親から期待される像をこどもが病理的に映し返したものであることを明らかにした。第4章では，他者からの視線が，恐怖から快感へと変化した症例を提示し，摂食障害においては，自己の身体に注がれる他者の視線が発症に一定の役割を果していることを明らかにした。

第Ⅱ部（理論編）第5章では，まず，わが国における戦後の神経症の時代的推移を文献的に展望し，心気神経症とヒステリーの減少，問題行動と抑うつ神経症の増加をみとめた。とくに1980年以降は，若い成人女性の問題行動（摂食障害）と対人緊張・恐怖が増加していた。つぎに，これらの文献の数的制約を補うために，医学文献のデータベース上の報告数の統計をとった結果，やはり過去20年間では，女性の神経症としては摂食障害の増加がもっとも顕著であることを確認した。この現象について，臨床経験，および，具体的な社会的指標との関連から考察した。摂食障害が増え始めた時期は，いわゆる消費資本主義への転換期に当たる。この転換はコンビニエンス・ストアという営業形態の中に，最も典型的に反映されていると考えられた。そこで，摂食障害者の報告数，コンビニエンス・ストアの店舗数，20歳台後半の女性のフルタイム就業率をみたところ，3者はよく平行して推移しており，摂食障害の体重による自己の差異化の病理は，コンビニエンス・ストアの産業形態で代表される消費資本主義の価値の差異化の構造と通底する特徴があることを論じた。

第6章では，摂食障害とヒステリーの病像や家族像を自験例も含めて比較し，ともに女性が社会から要請されていると思う像を，身体を使って社会へ誇張して映し返している点が共通していることを示した。次にこれらの疾患の患者の身体と他

者の視線との関係を検討し，摂食障害は転換ヒステリーと解離ヒステリーの両方の特徴を併せ持っていることを明らかにした。さらに，精神分析学的に女性になる発達の経路を考察し，社会からの期待の眼差しに応えようとする傾向性が，女性になること自体に伴っていることを指摘した。

最後に第7章で，ヒステリーと摂食障害の精神病理を精神医学の診断体系の変遷を含めて概観し，ともに「女性としての自分が何であるか」を社会に向かって表現する一つの病理的な形態であると捉えた。すなわち，ヒステリーも摂食障害も社会から期待される女性像への自己疎外であり，両者の症状の違いは社会の求める女性像の違いに対応していると考えられた。他者（社会）の視線と，それに応えようとする女性側の傾向性の相互関係のなかに，ヒステリーや摂食障害の病理が位置付けられると結論した。

論文審査の結果の要旨

神経症の病像が時代と共に変遷することはかねてより注目されており，とりわけ，女性における神経症の病像に関しては，社会的存在としての女性の機能が，近代以降大きな速度で変貌を遂げたことを背景にして，時代による変化が著しい。

神経症の病理を診断し治療するためには，社会構造が精神疾患に与えるこのような影響を適切に考慮に入れなければならないことは多言を要さない。しかしこの問題は，医学の領域で完結しておらず，他の領域の諸問題と関連しているために，必ずしも容易に取り組めるものではない。これまでの研究も，散発的であり，また印象による批評にとどまるものも多く見られている。本論文は，こうした問題の重要性と研究の現状に鑑み，女性の神経症に対する心理療法の実践を基盤としながらも，臨床の場に入射する歴史や社会の影響に目を配り，近年の神経症症状の形態や形成を，患者と社会の関係の網の目の中で，総合的に理解することを試みたものである。

本論文は第Ⅰ部と第Ⅱ部に分かれており，第Ⅰ部において著者は自らの心理療法の実践の記録を豊富に提示している。その多くは摂食障害であり，そのそれぞれについて社会に対する疾患の位置づけが考察されている。例えば，ある重症拒食症者においては，食を制限して痩せて苦しむ患者の身体が，家の跡取りという重圧に耐えて働く父親の生き方と同一視されており，そのことによって，理想的な跡取りとしての自己の姿が周囲に向けて主張されていた。また，いわゆる多重人格の症例においては，男にも女にもなれるいわば完全無欠の身体が，治療者に向けて主張されていたということが，濃密な患者—治療者関係，つまり転移の経験から明らかにされている。さらに，児童期から思春期の若い患者たちは，自己の身体を親自身のかつての不安な姿に同一化し，それを親に向けて能動的に映し返していたことが示されている。自己の姿を他者に向けて示すことのこの重要性は，視線恐怖から摂食障害へと症状の変遷を見せた症例において，きわめて明快に裏付けられている。このように著者は，具体的な症例を通じて，それまでは過去の母子関係などの個体的な要因に帰せられがちであった女性の神経症の心理構造を，社会とのきわめて具体的な動的交流の中に求めることに説得的に成功している。

第Ⅱ部では，第Ⅰ部で取り出された社会との関係をめぐる心理構造を，社会の歴史的変化およびそれが個人の内面にもたらした変化との関係において考察している。著者は，データベースに現れた限りその臨床論文において報告されたすべての神経症女性例の診断内容を経年的に調べ，いくつかの社会動態指標のうち，20歳台後半の女性のフルタイム就業率と，コンビニエンス・ストアの店舗数が，摂食障害の増加とかなり良く平行的な推移をしていることを見出している。そして，このことから，消費資本主義と言われる現代の経済構造の中において，自己の身体をも消費財として取り扱うことを余儀なくされた患者たちの無意識の構造を，精神分析学的に再構成している。これまでの神経症の時代的変遷を扱った文献は，臨床的なデータの処理に重点を置き，具体的な社会動態指標との照合を怠っていたということに照らすと，著者のこうした方法論は，きわめて斬新なものであり，今後のこの分野の研究に影響を与えるものである。また，個体の発達に限定して用いられがちであった精神分析理論を，患者と社会の関係に，事象に即して適用し得たことも高く評価される。第Ⅰ部と第Ⅱ部の考察を総合して，著者は，過去に隆盛をみたヒステリーを再吟味し，摂食障害は，社会に向けて理想的な女性像を先鋭化した形で見せるという点において，ヒステリーを受け継ぐ神経症病像の一つであると論じている。

このように本学位申請論文は，自らの臨床経験に照らして神経症理論を再検討し，人間の病理的な可能性と社会変化との関係を斬新な切り口で再構成しており，人間存在と環境との関係の基礎的構造を解明することをめざして創設された人間・環境学専攻人間存在基礎論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成14年３月11日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。